

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	主語初頭生起説から見た英語の完了構文 : 過去分詞の復権とhaveの意味論
Author(s)	田原, 薫
Citation	ニダバ , 27 : 57 - 66
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048029">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048029</a>
Right	
Relation	



## 主語初頭生起説から見た英語の完了構文

— 過去分詞の復権と have の意味論 —

田原 薫

## 0. はじめに：

真に科学たり得る文法の理論は、文の生成とともに文の解析をも説得的に説明できなければならない。すなわち発話者の側の作文・発話と同時に聞き手の側の聴取と理解（聴解）を扱わなければ、双方向的な（ものである）人間言語の文法にはならない。生成文法は文の生成のみを論じる片方向的なものであり、生成の基礎データは実証によらない思弁的な図式である。他方、聴解文法（というものがあるとすれば、それ）は実際に発話された音声、あるいはそれから形成された音声映像を基礎データとするから、仮に解析手順について思弁的であったとしても、少なくとも基礎データに関しては現実に立脚している。

英語のようなSVO型語順の言語では、典型的な文を聞き取った聴解者はまず{S<sub>1</sub>}、ついで{SV<sub>1</sub>}、ついで{SVO<sub>1</sub>}…といったように脳内に情報の集合を順次構築してゆくのであるから、文の生成の手順もそれと肖像的(iconic)であるのが望ましい。すなわち文の主語候補が動詞や目的語よりも早く文構築現場に導入されるような文法が望ましいが、チョムスキー派の「VP内主語仮説」(VP-internal Subject Hypothesis)では主語候補がVや目的語候補より上部、つまりより遅い構築段階に出現するようになっている。また、Chomsky(1995)の第4章‘Categories and Transformations’の枠組では、VPより上部の節点 $\nu$ Pの中に主語候補が置かれているが（以下「 $\nu$ P内主語仮説」）、やはり主語候補が動詞や目的語候補より遅れて節文構築に参加することには変わりがない。

本論考は上のような基本的観点から、主語候補を他の項や述語よりも早く構築現場に導入する句構造を採用する。まず原初的叙述力のあるゼロ述語 $\emptyset$ を設定し、その指定辞として主語候補NP $\emptyset$ を導入して[ $\emptyset_P$  NP $\emptyset$   $\emptyset$ ]の構造を作る。諸構文に共通なこの $\emptyset$ Pが上位の述語すなわちV（動詞）、A（形容詞）、P（前置詞）、P<sub>n</sub>（述語名詞=predicate nominal）の補語となり、空述語はやがて上位の述語に編入される。ここまでの話の詳細は『ニダバ』26号所載の田原(1997a)を参照されたい。V以外の述語を中核とする構文に必要なコピュラは時制子Tに付加されるものとする。〔完了構文に現れる助動詞 *have* も時制子Tに付加されるものとする。〕このシステムにおける他動詞能動および受動構文の構造を図1A・Bに示す。〔次頁：最高節点の一つ手前までを示す〕

図1 A (他) 動詞 (能動) 構文の構造: [構築は右から左へと進行する]

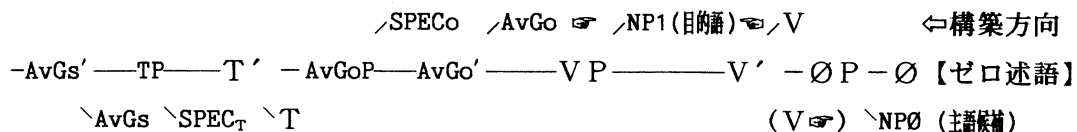
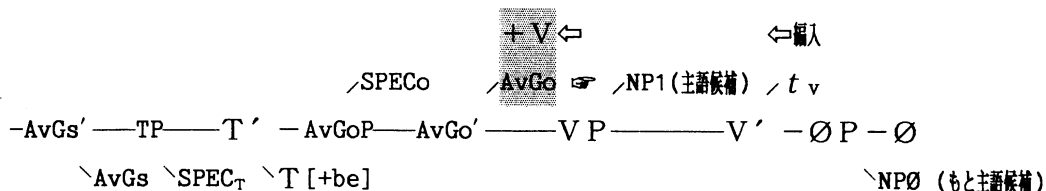


図1 B 他動詞受動構文の構造



まず図1 Aで(AvGo)というのは‘Adjectiverbal Guarantee for object’目的語のための形動詞的担保であって、「引率」の位置関係(⇒で示す)にある項の受動者的θ役割をチェックし、目的語にふさわしいかどうかを判定する。VがNP1に対してもつ関係は「配率」(⇒で示す)と言い、Vの直接的な項であることを保証する。これらの位置関係が作る「挟み統率」(⇒⇒)の効果によって、NP1は対格の認可と同時に受動的なθ役割の保証を得る。一方、NP0の方はSPEC<sub>T</sub>に転入し、そこで主格を認可され、さらに一致制御のためにこの図の上部(左方)にある筈のSPEC<sub>O</sub>(文主語)の座に就く。

図1 BではVがAvGoに編入されて複合範疇[A<sub>VG</sub>AvGo+V]すなわち過去分詞ができるが、V位置が痕跡になったのでNP1は「挟み統率」されなくなり、そのため対格を付与されない。そこで今度はNP1が主語候補となる。図1 AでもBでも主語候補はSPEC<sub>T</sub>に転入して主格を認可される。そのSPEC<sub>T</sub>は最終的にもう1段上の指定辞SPEC<sub>O</sub>の地位に昇進して文主語になるが、必要な主格認可と一致制御の話はここでは省く。

### 1. 主語初頭生起説(SOOT<sub>h</sub>2)に肝要な諸概念

主語初頭生起説(SOOT<sub>h</sub>2)を英語では‘Subject-Occurs-Originally Theory’と呼ぶことにする。略称は[su:0]と読む。‘2’という番号はこれに先行するSOOT<sub>h</sub>1(目的語指定辞起源説, Specifier-Original Object Theory)と区別するためである。もちろん両者は実質的に同じ理論であり、2は1の改良版であるが、1では主語候補の地位を述語Xの補語としていたので、いわば「X'内主語図式」であった。その図式では主語候補に対応する述語が動詞(V)であるか・形容詞(Aj)であるか・前置詞(P)である〔たとえば He is in the room. において〕かに従って「V'内主語図式」「Aj'内主語図式」「P'内主語図式」と言い換えなければならず、主語候補の共通特質を捉えきれない憾みがあった。そこで、[<sub>OP</sub> NP0 ∅]の構造を具体的な述語の登場以前に設定し、この中のNP0〔∅の投射を完結するから指定辞と考える〕を主語候補とすることによって、すべての場合に通用する主語候補の資格を(SPEC<sub>0</sub>として)決定することができた。

### 1. 1 必要な「古参統御」‘v(eteran)-command’の概念

生成文法ではc統御の概念が過重とも言える任務を負わされて大活躍したが、本システムにおいてもその重要さに変わりがない。しかし、構築型の文法としてそれに並んで重要なのはc統御の逆関係概念たる「v統御／古参統御」の概念である。従って‘if and only if  $\alpha$  c-commands  $\beta$ ,  $\beta$  v-commands  $\alpha$ .’ということになる。図1で見るとのどNP $\emptyset$ はそれぞれ自分以外の図に現れたすべての枝の成分をv統御している。また、図1で例示すればVはNP1とAvGoとを「直近的にv統御する(proximately v-command)」と呼ぶ。逆にc統御についても、AvGoはNP1とVとを「直近的にc統御する(proximately c-command)」ということにする。これらは次に述べる「配率」と「引率」の概念に関係してくる。

### 1. 2 「配率」「引率」そして「挟み統率」の概念

ミニ(マリスト)・プロ(グラム)においてチョムスキーは図2Aに示す階層関係概念を提出したが、内部領域と照合領域のそれぞれの内容に踏み込まないと意義が薄い。

図2A

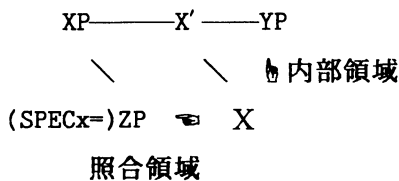
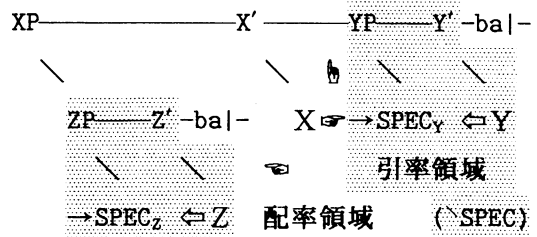


図2B



SOOTH2では或る主辞Xから見て、図2Bで網掛けによって示した範囲をそれぞれ「引率領域」「配率(はいつ)領域」と呼ぶ。補語と指定辞のそれぞれ主辞と指定辞にはそれらの効力が及ぶが、補語と指定辞のそれぞれ補語以下には[-ba|によって堰き止められて]効力が及ばない。図2Bで「XはSPEC<sub>y</sub>を引率する(X in-sorts SPEC<sub>y</sub>.)」 「XはSPEC<sub>z</sub>を配率する(X high-sorts SPEC<sub>z</sub>.)」のよういう。ただしXが機能範疇である場合はその引率の能力を認めない。Xが語彙範疇である場合、XはSPEC<sub>y</sub>を引率しているが、そのSPEC<sub>y</sub>は同時にYに配率されていることになる。この場合SPEC<sub>y</sub>はXとYに「挟み統率されている(be tongs-sorted)」と呼ぶことにする。GB理論の統率(government)はあまり有効な概念でなかったが、本理論では統率(sorting)が重要な働きをする。挟み統率の他に同方向からの共同統率〔並行統率(paralel sorting)と呼ぶ〕もあり、図2BでSPEC<sub>z</sub>はXに配率されているが、Zからも配率されている。これも副次的に重要である。

### 1. 3 $\theta$ 役割述語‘AvGo’と‘AvGs’の役割

本理論では図1に見るようにVの領域の上に抽象的な述語AvGoが掛かっているし、時制子Tの領域の上にも同様な述語AvGsが掛かっている。これらは一見ミニ・プロでのAgr<sub>o</sub>とAgr<sub>s</sub>に似ているし、実際、以前の版ではAGRO・AGR<sub>s</sub>と書かれていた。しかし‘agreement’とは語源的關係がなく、Adjectiv(erb)al Guarantee for (Role of) Object/Subject す

なわち目的語／主語のための形（容）動詞的担保である。「形動詞」というのはロシア語文法などで言われるが、形容詞的用法の分詞のことであり、実際AvGoが音的に実現する場合は過去分詞の形を取るのので、いわば過去分詞に共通のエッセンスと見なしてよい。これは受動性が相対的に高い項のθ役割をチェックする要素である。AvGsは主語にふさわしいθ役割をチェックするが、能動性・受動性に関しては中立である。以下では従来の論文に合わせて、AvGo／AvGsに代えてAGRo／AGRsと表記することにする。

### 1. 4 共同統率による格選択の原理（列挙するにとどめる）

- ① T（独立時制＝過去／非過去の場合）とAGRsはその共通の被統率子に主格を格選択する。〔統率の概念は引率と配率を含む。共通の被統率子は挟み統率される。〕
- ② V（V痕跡を除く）とAGRoはその共通の被統率子に対格を格選択する。
- ③ P（前置詞或いは斜格選択子）とAGRzはその共通の被統率子に斜格を格選択する。
- ④ V（V痕跡を除く）とAGRzはその共通の被統率子に与格を格選択する。〔この場合、共通の被統率子は並行統率（ともに配率）される。〕
- ⑤ そのままの位置で格選択される成分は（格選択のために）移動してはならない。そうでない場合は、格選択に寄与する要素1個のみに統率されている成分を優先的に格選択可能な位置、すなわち挟み統率を受ける空き位置に移動せよ。格選択に寄与する要素1個にさえ統率（引率または配率）されていない成分は、それを情報上生かしたければ、その文法資格を変更せよ。

## 2. 基本的な構文における格選択とθ役割照合

### 2. 1 他動詞能動構文

(1) Cain killed Abel.

完了構文を考察する準備として、単純時制構文の生成過程を見ておこう。

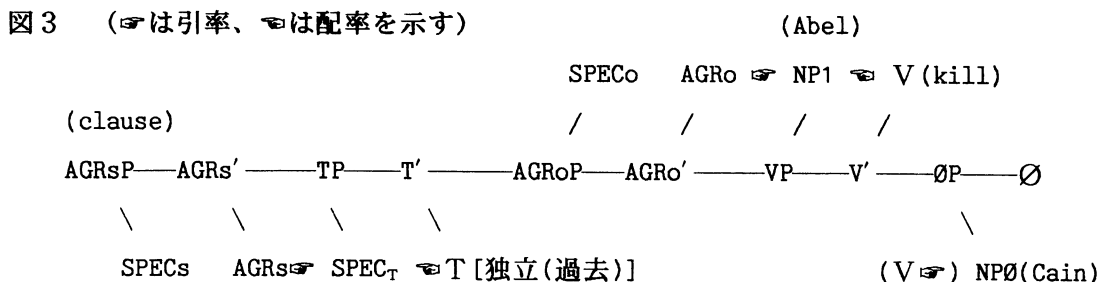
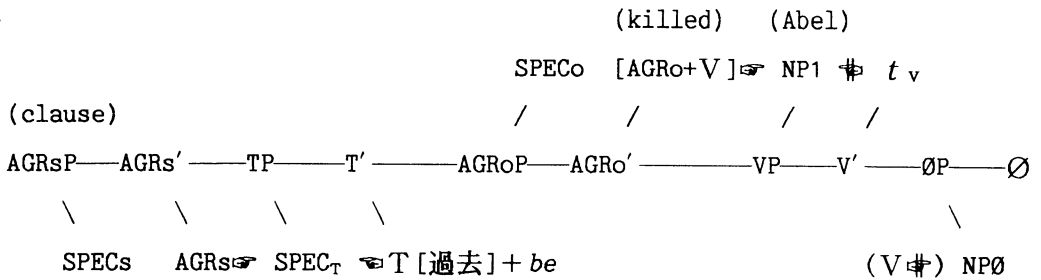


図3でNP1(Abel)は上記原理②により現場で対格を認可され、AGRoの引率の効果によって受動的なθ役割を保証される。NP0(Cain)は⑤によりSPEC<sub>T</sub>に移動し、①により主格を認可される。格選択のための移動はこれで終わるが、一致制御のためこれはさらにSPEC<sub>s</sub>に移動し、文主語となる。VとTの融合は音声構築部門で行なわれる。

## 2.2 他動詞受動構文 (0. の末尾、図1Bの説明を参照のこと)

(2) Abel was killed by Cain.

図4



図でV位置が痕跡化したのでNP1(Abel) はもはや配率を受けない。従って挟み統率されず、対格は認可されない。原理⑤によってNP1はSPEC<sub>T</sub>へ送られ、①によって主格を認可される。SPEC<sub>s</sub>への就任の機構は前述のとおり。NPØ(Cain)は格選択要素に統率されなくなったので、情動的に生かすには修飾語(ここではby-phrase)に資格を変更しなければならない。Tと結合するべきVがなくなったので、代償的にTにbeが付加される。

## 3. 動詞 have の作る構文と意味論

動詞 have は所有とか使役、間接受動など種々の意味をもつが、その原義は《存在せしめる》或いは《存在せしめている》であると思われる。〔ただし存在が主体の意/利益に反する場合もあるから、その際は《存在を甘受する》《存在を甘受している》となる。〕それが物(entity)に対して適用されて《或る物を存在せしめている》ことになれば「その物を所有している」わけであり、事態或いは出来事(event)に対して適用されれば《或る事態を存在せしめる》、すなわち「その事態を引き起こす、或いはひっかぶる」という使役や間接受動/結果保存の意味を招来するのである。

### 3.1 通常の他動詞 have の構文と意味論

(3) I have a car. (4) Have you a car? (5) I have not a car.

通常の所有の意味の構文 I have a car.などは図3をそのまま適用して分析することができる。ただ、アメリカ英語と標準イギリス英語との比較では、否定や疑問の場合を考慮すると、後者では肯定平叙文の場合も別扱いにした方がよいであろう。

これらのイギリス英語の構文では have は助動詞的な振舞いをするので、分析は図5

図5 [ have はTに付加される]

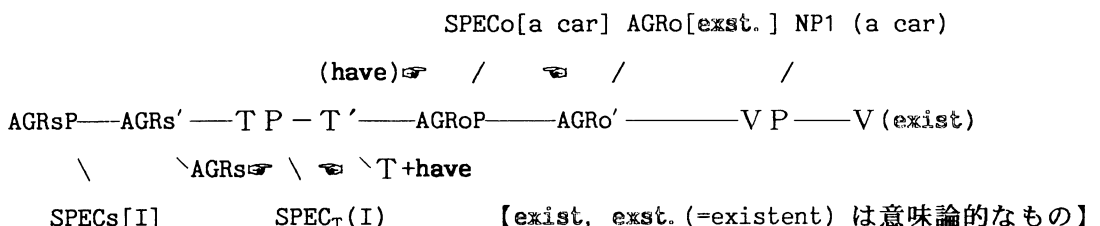


図5でVは 'exist' を意味する無音の自動詞、AGRoは 'existent' すなわち存在対象という一種のθ役割を表わすと仮定されるが、無音の要素だけの挟み統率では明瞭な格を表現し得ないので、NP1はSPEC<sub>o</sub>の位置に移動し、haveとAGRoの挟み統率を受けて対格の認可を得る、と考えられる。〔このメカニズムは完了構文の場合にも発現する〕

### 3.2 使役的な have の構文

(6) I had him clean the room.

図6

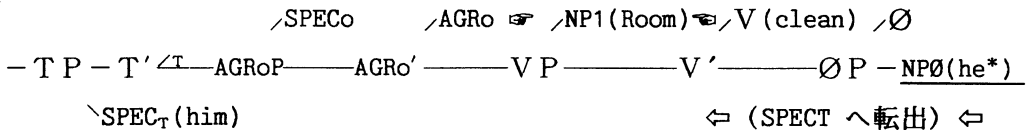
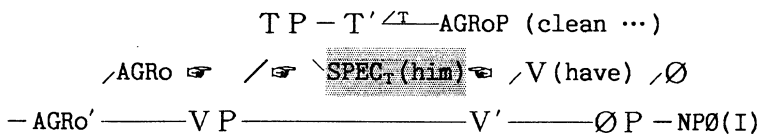


図6は「従属節」として主節に埋め込まれるTPで、主節のV(have)の指定辞に位置づけられる。図7は主節における従属節の地位を示す。主節のVとAGRoとの配率・引率の力は従属節のSPEC<sub>T</sub>(him)まで到達するから、これは挟み統率され、対格を認可される。従属節内で格選択を受け得なかったNP $\emptyset$ =SPEC<sub>T</sub>(him)はここで初めて安定する。

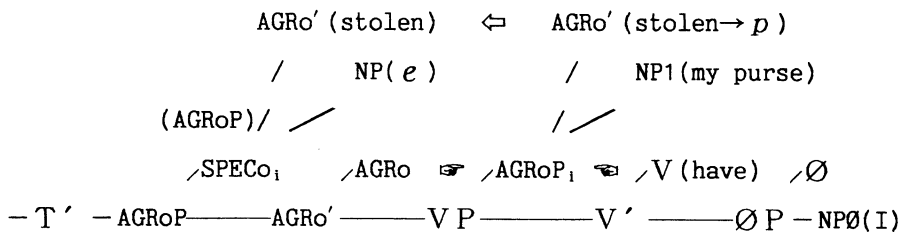
図7



### 3.3 間接受動構文の have

(7) I had my purse stolen. (I had the room cleaned.)

図8



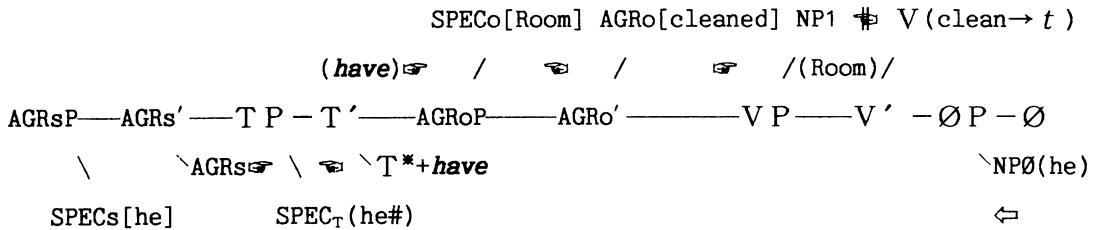
「従属節」の資格はAGRoPである。この [AGRoP my purse [AGRo' stolen ...]] は「情報分割」という操作を受ける。すなわち被叙述項を生かし叙述部を消した [AGRoP my purse [AGRo' p]] という版と、被叙述項を消し叙述部を生かした [AGRoP e [AGRo' stolen...]] という版（それらを「情報分枝」と呼び、同一指標が付される）に分割される。ここでpは音形のない述部、eは音形のないNPである。情報分枝のうち前者がVの指定辞として残り、後者は（主節の）SPEC<sub>(AGR)</sub>oの地位に入る。以上の話を単純化して模式的に(7)を書けば、I had [my purse - p]<sub>1</sub> [e - stolen]<sub>1</sub>. のようになる。

#### 4. 助動詞 have と過去分詞で作る構文

(8) He has cleaned the room. [図では the room を便宜上 Room と記す]

これはすなわち完了アスペクト構文のことであるが、次のように分析される。

図9 [図5と対比されたい]

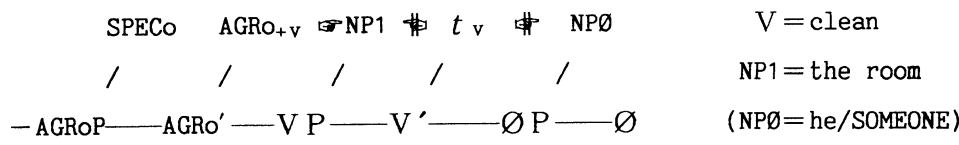


ここでAGRsは主語にふさわしいθ役割をチェックする形容詞的担保(要素)であり、Tとの「挟み統率」によってその対象のSPEC<sub>T</sub>に主格を認可する。図9は He has cleaned the room. の構造である。ここでも受動構文の場合と同様VがAGRoに編入されて過去分詞 cleaned ができるが、それは、言及内容が基準時から見て過去であるため、出来事の過程よりも結果の方が現在に近いからである。また意味論的には当然、過去世界のV(clean)はT(現在)と結合できないので、1段階上位の述語AGRoに編入されると考えることもできる。NP1は「挟み統率」されず、最初の出現位置では格認可を受けられないが、SPEC<sub>o</sub>の位置に上昇すれば助動詞 have [Tに付加されて出現する]とAGRo[cleared]とに「挟み統率」されて対格を認可される。なお、時制子Tは過去と現在の二重性を持ち、NPØ(he)は過去T<sub>1</sub>に関係し、SPEC<sub>T</sub>(he#)は同一指示ながら現在T<sub>2</sub>に関係する。TはT<sub>1</sub>がT<sub>2</sub>に吸収編入されてできたものと理解される[従ってTはT<sub>2</sub>の現在性を継承する]。

#### 5. 間接受動構文と完了アスペクト構文と受動構文との共通性

He had the room cleaned.と He has cleaned the room. の意味論には The room was cleaned. という必要条件が内包されている。その統語論的肖像(icon)が図10である。

図10



この構造が①文の幹になるか/② have の指定辞になるか/③ have の補語になるかが選択肢である。いずれにせよVがAGRoに編入されて過去分詞ができるが、最も基本的な場合は①の場合すなわち受動構文であって、過去分詞には主語のもつ主格が浸透してくる。②は間接受動構文を生成するが、図8からわかるようにNP1は主節のVとAGRoとから挟み統率を受けるので対格を認可され、その対格が述語たる過去分詞にも浸透してくる。以上



二つの場合には過去分詞[AGRo+V]のもつ形容詞的性格が強くと発現し、NP1 との性・数・格の一致を行なうが、③の完了構文の場合には、たとえば古英語でも俗ラテン語でも、完了構文の発生初期には一致現象を見せたとはいえ、歴史を通じてそれは衰退の一途をたどり、近代型のゲルマン語・ロマンス語では過去分詞は最も無標的な形を示す。〔ただしコピュラを助動詞とする自動詞完了構文の場合はそうでない。これは別稿に譲る。〕

③の場合に一致が衰退した理由は、この場合の過去分詞が動詞的性格を強く帯び、格と性を搬送できないからと考えられる。さらにその理由に遡ると、助動詞 *have* は形式的には動詞で・機能的には一種のθ役割〔結果保持者〕述語すなわち形容詞に近い。その分だけAGRo[*cleaned*] は機能的に動詞的性格が強まるわけであるから、形式的には形容詞で・機能的には動詞的であると言える。また他方で、VがAGRoに編入された動機を考察すると、①と②の場合はNP1 のもつ受動性の焦点化がAGRoの音形化を要求したことが動機であったのに対し、③の場合は格別受動性が強調されたわけではなく、*have* とVとの意味的時制のミスマッチがVのAGRoへの上昇を惹き起こしたのであるから、この場合の過去分詞の範疇資格AGRoは形式的なものにすぎない、とも言える。さらに〔ドイツ語を例外として〕この構文では語順面でNP1=SPECo よりも概ね過去分詞が先行するから、一致は予測的に行なわれる筈であり、次第にその困難さが嫌われるようになった、とも考えられる。その傍証の一つとして、フランス語では目的語が人称代名詞や関係代名詞であって過去分詞に先行する場合のみ、一致が復活することを挙げてよいであろう。

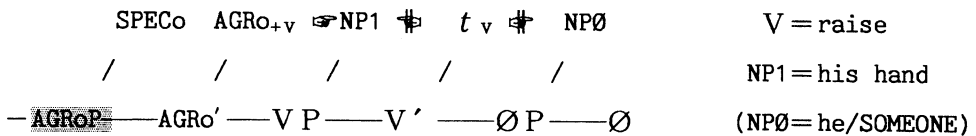
6. 補遺

本論考で重要な役割を果たした新しい概念に①情報分割があり、②外転がある。とりあえずこれらの概念が有効に働く統語現象の分析の例として、各々一例を挙げておく。

①情報分割の適用例：「with+目的語+目的述語（特に過去分詞）の構文」

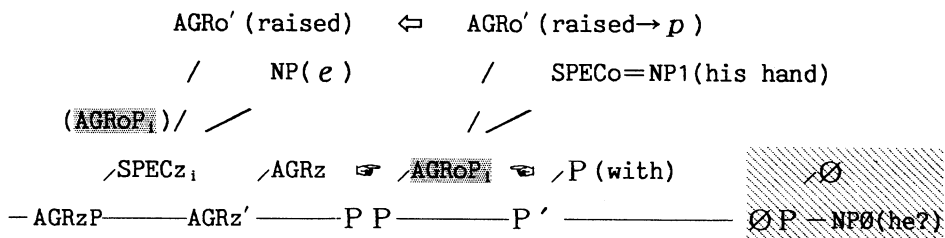
(9) John crossed the road with his hand raised.

図10'〔過去分詞ができるまでの過程：図10と同形〕



この図10' が情報分割され、各々の分枝が図11のように主節に収容される。

図11 (= 図8')〔VでなくPが、またAGRoでなくAGRzが出現するのに注目！〕



②外転の適用例：「ロマンス語型（日本語型）の使役構文」

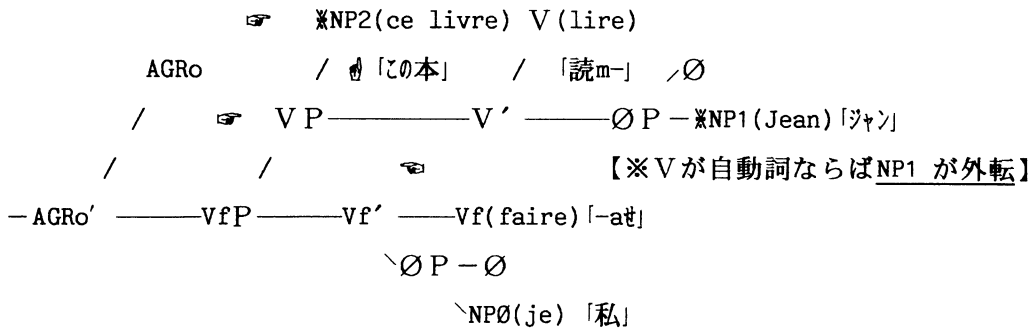
(10) Je fais travailler Jean. 「私はジャンを働かせる」〔自動詞主語→対格〕

(11) Je fais lire ce livre à Jean. 「私はジャンにこの本を読ませる」

(12) Je fais lire ce livre par Jean. 〔他動詞主語→与格／斜格〕

いわゆる Clause Union による使役構文は、被使役 VP を使役動詞 Vf の指定辞として埋め込むが、AGRo は Vf と組むもの 1 個しかない、という構造で簡潔に分析できる。図 12 がそれであるが、動詞が 2 個（他動詞と使役動詞）あっても AGRo が 1 個しかないから、対格項は 1 個しか認可できない。つまり挟み統率を受ける NP2 に対してだけである。(12) のように V が自動詞ならば、NP2 の位置が空いているから、ここに NP1 (Jean) が外転してくる。このメカニズムは基本的には日本語使役構文にも通用する。

図 12



なお、(13) I make John work. (14) I make John read this book. のような英語の使役構文は図 6・図 7 に示す TP 埋め込み型であり、型の混同は許されない。こちらには対格項が 2 個あることに注目されたい。本稿は英語の完了構文に関する論考であり、他言語の使役構文の話はエピソードにすぎないが、3. 2 で使役的な have の構文を扱った関係上、その型で日本語やフランス語の使役構文を割り切ろう、という暴挙を犯す人も（変形文法家のうちには）無きにしもあらず、と思うので、注意を喚起しておきたい。

7. まとめ

SOOTH 2 のように、対格言語において目的語よりも主語の方を早く動詞と結合して第 1 次シンタグマを作るべし、との思想は山口(1995)にも見られる。山口によれば、それは Trubetzkoy の思想でもあるとのことである。より能動的な項・述語からより中立的或いはより受動的な項・述語へと構築の順序を進めることは、認知文法の Causal Chain の思想とも整合している。近年のチョムスキー理論のように、目的語の格照合のための移動とか、主語候補と目的語候補の交差移動などの矛盾 (the paradox of Case theory) は、本理論では生じないのである。

本論考の最大のメリットは、実は「放蕩息子の帰還」であり「過去分詞の概念の復権」

である。過去分詞の概念は何も悪いことをしていないのに、チョムスキー派はこれを放蕩息子のように40年にわたって勘当・追放してきた。初期理論や「標準理論」で受動構文や完了構文の定式化にあたって‘be -en’とか‘have -en’といった、不連続構成素からなる「助動詞」あるいは操作子を設定し、彼らは過去分詞をVと-enとの合体で説明しようとしたが、受動と完了の-enがそもそも同じものなのか、或いはなぜ同じものなのか、という疑問には皆目解答を与えることができなかつたのである。結局は両者に共通な「過去分詞」という概念を確立することができず、‘be killed’, ‘have killed’は各々‘kill’とは別個の語彙項目として扱うしかなかった。そんな理論に惚れ込んでおきながら、生成文法家である大学（英語）教師は、授業では「過去分詞」の概念を使わざるを得なかつたから、ジキル博士とハイド氏よろしく二重人格も極まれりと言ってよい。このような情けない茶番劇はもう止めにしたいものである。SOOTH 2では、ここに「過去分詞」の概念の復権を高らかに宣言する。補遺も含めて4つの例で示されたように、それはVを抱合したAGRoの実現である。何らかの理由でVがTとの結合の道を絶たれたとき、V表現のlast resortとして過去分詞が現れる、ということになる。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. The MIT Press.
- 田原 薫 (1995 a) 「Xバー理論の徹底批判とその対案V’内主語図式の検討」『言語文化学会論集』第5号、pp. 3~19、言語文化学会。
- 田原 薫 (1995 b) 「指定辞と補語の地位づけに関する一提言」*Kansai Linguistic Society* 15, pp. 79~89、関西言語学会。
- 田原 薫 (1996 a) 「SOOTHと挟み統率から開ける展望——ドイツ語 sich V lassen 構文を中心に」『ニダバ』第25号、pp. 137~146、西日本言語学会。
- 田原 薫 (1996 b) 「英語のコピュラ文、特に難易文の‘SOOTH’流統語分析——a Soothsayer Program for Linguistic Theory」『言語文化学会論集』第6号 pp. 1~10、言語文化学会。
- 田原 薫 (1996 c) 「Quo Vadis Domine, Magne Frater Generatorum-Transformatorum?」『言語文化学会論集』第7号、pp. 139~152、言語文化学会。
- 田原 薫 (1997 a) 「ゼロ述語から出発する句構造文法——補語名詞句否定説：名詞句すべて指定辞説」『ニダバ』第26号、pp. 1~10、西日本言語学会。
- 田原 薫 (1997 b) 「新句構造文法SOOTH 2の基本理念——意味と形式の接点を目指して」『言語文化学会論集』第8号、pp. 59~71、言語文化学会。
- 田原 薫 (1997 c) 「新句構造文法SOOTH 2の基本理念——意味と形式の接点を目指して（続篇）」『言語文化学会論集』第9号、pp. 65~76、言語文化学会。
- 山口 巖 (1995) 『類型学序説』。京都大学出版会。